

## 書評

橋本真紀 著  
『地域を基盤とした子育て支援の専門的機能』  
(ミネルヴァ書房, 2015年)

中谷 奈津子\*

## I はじめに

著者の整理によれば、地域子育て支援とは「親子が生活を営む地域の中で、親子の主体性を尊重しながら、家族・個人を含めたすべての社会資源と協力し子どもの育ちと子育てを支え、また地域の子育て環境を醸成する営み」(p.25) ととらえられる。例えば、地域子育て支援拠点事業（以下、拠点事業）として行われている、子育て親子の交流の場の提供、相談援助、地域の子育て情報の提供、子育てに関する講習の実施などがあげられる。拠点事業については「ここに来る前は、とにかく何もかもわからず育児が不安でした」「スタッフの方に良いアドバイスをいただき気持ちが悪くなりました」などといった利用者からの声もあり、親子が気兼ねなく集い、つながりあう地域の居場所としても期待されている<sup>1)</sup>。

著者は、拠点事業の前進でもある地域子育て支援センター事業に保育士として従事した経験をもつ。地域子育て支援において求められる「保育ではない業務」に直面し、自らが担うべき機能を模索したと振り返る。1993年保育所地域子育てモデル事業創設時、子育て支援の役割を担うのは「保母等」と位置付けられたものの、本当に地域子育て支援は保育の専門性で担えるのかという著者の実践に基づく強い疑問に、本書は端を発している。

一般的には、子育て支援は「“子育て”の支援」

であり、保育士は子どもを育てることを専門としているため、その役割を担うにふさわしいと思われるかもしれない。しかし子どもを育てる営みは、保護者自身の家族関係や地域における人間関係のほか、社会経済的要因など子育て以外の要因にも大きく影響される。孤立した家族やさまざまな生活課題を抱える家族への支援も想定され、生活習慣の形成や豊かな遊びを通して職員組織で多くの子どもを保育する専門性だけでは、多様な背景を持つ子育て家庭を支援していくことは難しい。

著者は、いわゆる「保育」とは異なる、個人と地域の人びとの双方を対象とする地域子育て支援における職員の働きとそこに生じるダイナミクスを伝達可能なものにする理論を探し、その糸口を「地域を基盤としたソーシャルワーク」(以下、CBSW)に見出した。本書は、そのCBSWの理論を土台に「地域を基盤とした子育て支援」の専門的機能を抽出し練り上げていくプロセスを丁寧に示し、博士論文としてまとめたものである。

## II 本書の構成および概要

本書は6章から成り、最終的に「地域を基盤とした子育て支援」の定義とその「専門的機能」を導き出している。「地域子育て支援」ではなく「地域を基盤とした子育て支援」が冠される本書のテーマからも推察されるように、既存の専門機関の機能の延長ではない、新たな実践理論を基礎とする

\* 大阪府立大学人間社会システム科学研究科・地域保健学域教育福祉学類 教授

<sup>1)</sup> 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室『地域子育て支援拠点事業実施のご案内』2007, p.13。

実践概念を提示しようという著者の強い意思がうかがえる。

第1章では、子ども家庭福祉政策における地域子育て支援の台頭と展開、および地域子育て支援をめぐる諸説が概観されている。地域子育て支援は、黎明期、政策的合意期を経て社会的合意期に至ったと整理されており、1990年代の黎明期においては「子育て支援への賛同」と「代替機能による養育機能の低下への懸念」という両価感情から、社会的な合意は困難であったという。しかし2012年の「子ども・子育て支援法」制定により、地域子育て支援の充実が喫緊に取り組むべき課題として認識され、社会的合意を得るようになったことが確認されている。また2008年の社会福祉法改正により、地域子育て支援拠点事業は保育所と同様の第二種社会福祉事業として位置付けられ、保育所の保育事業の延長線上には位置しない、地域の子育て支援という固有の領域を有する事業と認識されるようになった。

さらに地域福祉の動向を踏まえ、地域を基盤として子育て支援を展開すること、またその方法をソーシャルワークに求める必要性について論じている。著者は、乳幼児期の発達特性から日常生活や地域の関係性の中にあるがまま支援する方法論が必要であると考え、援用する実践理論としてCBSWを取り上げた。CBSWとは「ジェネラリスト・ソーシャルワークを基礎理論とし、地域で展開する総合相談を実践概念とする。個を地域で支える援助と個を支える地域をつくる援助を一体的に推進することを基調とした実践理論の体系である」と定義されている。CBSWに示される個と地域を一体的にとらえた支援は、著者のいう「日常生活や地域の関係性の中にあるがまま支援すること」と共通すると捉えられている。本章のしめくりとして、CBSWを実践理論とする地域を基盤とした子育て支援の可能性の検討を試みるといった、本書の研究目的が明確に提示されている。

第2章では、拠点事業の政策的方向性が確認されている。保育地域子育てモデル事業、地域子育て支援センター事業（以下、センター事業）、さらに拠点事業として引き継がれていく各実施要項か

ら、その改正点を整理することで3つの政策的方向性が提示されたという。それは①地域子育て支援におけるマネジメントから地域子育て支援の資源の充実への転換、②地域子育て支援における地域住民活動等「地域」との関係の強調、③必ずしも保育の専門性や技術、知識を必要としない事業展開の想定、である。

一方、先行研究のレビューからは、センター事業の実態として、従事者は常勤の保育士が多く他専門職の配置が少ないこと、実施事業は育児相談や子育てサークル支援が多く、提供型の事業形態に偏る傾向にあることなどが把握されるという。期待される機能は、地域子育て支援におけるソーシャルワーク機能、マネジメントやコーディネートなどといったものが指摘される一方で、地域資源との連携の低調さ、地域福祉の観点の弱さも示唆されている。

これら政策的な変遷と先行研究のレビューから、著者は、センター事業の創設時に掲げられていた事業の趣旨が、実際の事業展開とは隔たっており、実態に沿う形で実施要項が改訂されたのではないかと推察する。さらに、センター事業が拠点事業となった実施要項には、「地域子育て支援機能の充実を図り」とされ、拠点事業として地域の“資源の充実”を図ることが目指されることとなった。著者の指摘によれば、これにより拠点事業に期待される機能は大きく転換したという。さらに拠点事業実施要項における従事者についても、保育の専門性に依拠しない姿勢が示されている。こうした動向から、必ずしも既存の専門機関、専門職のみが地域子育て支援を担わなくてもよい状態が生じることとなり、地域子育て支援を主たる業務とするための固有の実践理論や方法論の構築の必要性が再確認されている。

第3章では、拠点事業の専門的機能を検討するためには、実践の構造や機能の把握が必要であるとして、従事者が担う業務を定量的に把握分析するための業務分析指標を作成している。抽出された業務分析指標項目について、著者は、「指標に表出する広範な業務からすれば、拠点事業を社会福祉援助と位置付け、社会福祉士が担う業務ととら

えても違和感はない」(p.95)とその立場を明確に示している。

第4章では、拠点事業における実践の構造を明らかにするため量的調査の報告がなされている。実践の構造は、実際業務（外部構造）と機能（内部構造）から成るとし、実際業務の把握には先に得られた業務分析指標を、機能の把握についてはCBSWの8機能を援用し、アンケート調査を実施している。

調査対象は、全国の拠点事業センター型である。CBSW項目の因子分析からは「地域による支援」因子と「予防支援」因子が抽出され、両因子得点の高い群をCBSW高群と命名している。業務分析指標項目についても因子分析が行われ、その関連が検討されている。特にCBSW高群では、個別援助業務に高い得点を示すと同時に、他機関やNPOとの連絡調整、地域住民との関係づくりなど、専門機関との連携やインフォーマルな資源を視野に入れた地域支援活動業務を積極的に行う様子が浮き彫りとなった。CBSW理論の理念には、地域住民等のインフォーマルサポートが援助システムに積極的に参画することがあるとされ、CBSW高群の傾向は、個別援助と地域支援活動を並行して展開するというCBSWの実践に極めて近い構造にあると捉えられた。

第5章では、地域を基盤とした子育て支援の専門的機能の明確化を目指し、センター型に従事する担い手の働きと特性の検討を目的としている。先のCBSW高群は、地域を基盤とした子育て支援を実現している可能性を有していたことから、CBSW高群の従事者にヒアリング調査を実施し、先駆的事例に共有される実践の要素を明らかにしていくという帰納的な調査手法を採用している。調査の結果、ニーズや状況の明確化、母親の力の醸成、母親のサポート体制の形成、当事者の活動と地域参画の支持、地域住民の支援活動の支持、ネットワークの形成と活用といった6つの構成要素が抽出された。

第6章では、6つの構成要素の汎用性の検証を目的として、それぞれの構成要素における下位概念と、CBSWの機能のひとつである「個と地域の

体的支援」機能とを照合している。CBSWにおける「個と地域の一体的支援」には、本人の支援に直接かかわる「個を地域で支える援助」と、地域住民がほかの住民にかかわったりワーカーが圏域全体を視野に入れサポート体制を拡充したりする「個を支える地域をつくる援助」の二つのアプローチがあるとされる。

「個を地域で支える援助」との照合からは、母親の主体性を喚起する援助に向けた関係の形成、地域住民や専門機関とともに取り組む母親を核としたサポート体制の構築が特性として導き出された。また、「個を支える地域をつくる支援」においては、地域住民による即応的で柔軟な資源の創出の支持が特性として認められ、母親と母親を核とするサポート体制で支える環境をつくる働きととらえられた。

著者は、これまでのプロセスを経てようやく「地域を基盤とした子育て支援」の定義に至っている。それは、「親子が生活を営む地域の中で、親子の主体性を尊重しその力を醸成しながら、親子が地域の関係の中に位置付けていくことを支えるとともに、地域の全ての人々や資源とともに親子の育ちを支える環境を醸成する営み」であるとされる(p.167)。また先の6つの機能を「地域を基盤とした子育て支援実践の専門的機能」として再提示するに至っている。

### Ⅲ 本書の評価と課題

地域における子育て支援は、乳幼児の日常生活圏域において家族のあるがままの状態で行うことが必要であり、地域の文化や資源、社会関係をとらえ、子どもの育ち・子育てと地域の双方を支えていくことが求められる。本書の意義は、その営みは「保育」の専門性を基盤とするよりも、ジェネラリスト・ソーシャルワークを基礎理論、CBSWを実践理論とした援助の展開が有用ではないかという明確な問題提起から、理論と実践の緻密な相互往復を経て「地域を基盤とした子育て支援」という新たな実践概念を提示したことにある。さらに、CBSW機能を援用し、全国調査を踏

また上で先駆的事例から帰納的に「地域を基盤とした子育て支援における専門的機能」を導き出している。

著者も述べるように、このことにより従事者は拠点事業の機能を俯瞰し、自らの役割を具体的・客観的にとらえることが可能となった。また従事者の基礎資格が多様化する中で、それらに依拠せずとも実践の目指すべき方向性を共有することができるようになった。さらに母親の力の醸成や母親のサポート体制の形成といったことが、地域と全く独立して成し遂げられるものではないことが明確に示されている。つまりそれらは、関係機関や地域住民などといった地域における多様な人々との関係性を土台とする有機的で重層的なネットワークのもとに実現されているのである。本書で繰り返し述べられている「個と地域を一体的にとらえる支援」の実践の可視化が果たされたともいえる。

著者の提唱する「地域を基盤とした子育て支援」という実践概念は、今後、実践と研究の両領域に大きな影響を及ぼしていくものと思われる。その専門的機能の一側面を暗黙知から形式知へ昇華させたという点で、本書の果たす社会的役割は大きく、本書は高い評価に値する。

一方で、いくつかの課題も残される。第一に、量的調査における類型化に関する課題である。第4章では、CBSW項目の因子分析を経て、回答者を4類型している。手続き自体に問題はないが、前半の議論からすればCBSW高群の回答者が最も多くなることに、評者は違和感をぬぐえなかった。この結果からすれば、「保育」の専門性を実践基盤としている従事者が圧倒的多数を占めるにもかかわらず、現在、全体の3分の1の従事者は、ジェネラリスト・ソーシャルワークを基礎理論とし、CBSWを実践理論とする「地域を基盤とした子育て支援」を実践していることになる。より明確な主張にするために、類型方法やCBSW項目自体の精緻化など、再考していく余地はある。

第二の課題は、分析において理論と実践の相互往復が緻密になされるがゆえ、理論的な説明の弱さが相対的に目立つ点である。例えば、第6章に

おいては、導き出された6つの構成要素とCBSWの機能との照合が行われているが、その中でも「個と地域の一体的支援」の機能に焦点を当てた分析がなされている。CBSW機能に関する説明は若干なされているものの、ほかの研究領域での本機能に関する議論展開をはじめ、さらにその機能に着目した理由等も示すことで、地域子育て支援におけるCBSWの視座の必要性がより明確に主張できると思われる。またCBSWの理念には、地域住民等のインフォーマルサポートの積極的参加があるとされているが、各所において地域住民の主体性に関する記述にもう少し力点が置かれると、明快で説得的な論点がさらに浮かび上がると思われた。

第三に、提示された6つの構成要素への指摘である。拠点事業の特性として、著者は「幼稚園や保育所のように契約により関係が成立することはほとんどないため、関与と関係の継続には親の意思が強く影響する」(p.124)と述べ、母親への意図的関与の必要性を示唆している。著者はこの特性に関して「母親との関係の構築」というコードを作成し、【母親の力の醸成】に集約させている。親の意思によって関与や関係の継続が決定されていくといった拠点事業の特性は、援助関係の成立そのものにも影響を及ぼすものである。母親との関係構築に向けた働きをより具体的に抽出するとともに、独立した要素として位置付けることで、拠点事業の特性に応じた要素の生成により近づくとも思われた。

本研究の現段階での到達点は、「地域を基盤とした子育て支援」の端緒を開いたことである。専門的機能の詳細化、精緻化を図り、より確実な援助方法論の確立を期待する。評者の立場からすれば、子育て当事者や地域住民からみた従事者の機能や効果検証、高いCBSW機能を備えた従事者自身を支える個人的・組織的・社会的要因等の検討も興味深く、それらを考慮に入れた「地域を基盤とした子育て支援」の体系化が望まれる。その際、拠点事業にとどまらない高齢者や障がい児・者なども視野に入れた包括的なCommunity-Based Family Support体制を構想し、構築していく

ことも求められる。その上で、実践理論、実践概念を次世代に伝えていくための養成・研修システムの開発とその普及も期待されるものとなる。著者の研究が、これで途切れることなく今後さらに

進展していくことを心から願っている。

(なかたに・なつこ)